

インフルエンザ脳症について

1. インフルエンザ脳症とは？

インフルエンザ脳症は、小さなお子さんがインフルエンザに罹ったときに発病する、最も重い合併症です。毎年、数百人が発病し、死亡率は小児科医を中心とした多くの医療従事者などの努力により、ここ数年間で約 30%から 15%程度まで改善してきました。しかし、25%の子どもに後遺症や障害が残り、治癒後もリハビリテーションが必要になることもあります。

インフルエンザ脳症は、脳の中にウイルスも炎症も見あたる訳ではなく、インフルエンザの感染をきっかけとして脳が腫れ、頭の中の圧力が高まり、脳が圧迫されて脳全体の機能が低下し、意識障害や異常行動などの神経症状をおこします。



インフルエンザ脳症の特徴

1. インフルエンザの流行の規模が大きいほど発症が多発する。(特にA型の流行時)
2. 主に6歳以下の小さな子供が発症し、発熱後数時間から1日と神経症状が出るまでの期間が短い。
3. けいれん・意味不明な言動・急速に進行する意識障害が主な症状である。
4. 死亡率は約15～30%であり、後遺症も25%の子供に見られるなど、重い疾患である。
5. 欧米に比べ、日本に多い。

脳症の原因は不明ですが、体内のウイルスへの免疫反応が強すぎて脳が腫れたり、血管や臓器が傷ついて発症すると言われていました。また最近の研究で、ある種の解熱剤（ジクロフェナクナトリウムやメフェナム酸など）を服用するとインフルエンザ脳症の死亡率が上昇することが判明しました。

これまでの季節性のインフルエンザの場合、インフルエンザ脳症は1歳をピークにして幼児期に多く発症するとされてきました。しかし、平成21年5月から日本で流行している新型インフルエンザA/H1N1においては、5から9歳をピークに1歳から14歳まで幅広く出現しており、注意が必要です。

2. 家庭におけるインフルエンザ脳症に対する注意事項

(1) インフルエンザに対する一般的注意事項

子供には手洗い・うがい・咳エチケットをはじめ、普段から健康的で規則正しい生活を送らせるようにしましょう。

インフルエンザ流行時は毎朝必ず体温を測定し、発熱や調子が悪いようなら無理して登校させず、すぐ医師の診察を受けさせましょう。

インフルエンザ脳症は季節性・新型を問わず重症です。決して油断せず、病院の早期受診、早期診断、早期治療が大切です。

(2) 発熱時、インフルエンザにかかった時の注意事項

症状に注意

インフルエンザ脳症は、発熱の始まりと同じ日（数時間後のこともあります）か、翌日に発症します。特に次のような症状があるときは要注意です。すぐに医療機関を受診してください。

けいれん

意識障害（眠ったまま呼びかけや刺激しても目が覚めない、ボーっとしている、ウトウトするなど）

異常行動（普段とは全然違うおかしい言動で、動物やアニメのキャラクターなどが見える幻視・幻覚を中心とした意味不明の言動など）

解熱剤に注意

成分表示でアスピリン、メフェナム酸、ジクロフェナクナトリウムと表示されている解熱剤やかぜ薬は、解熱作用は優れていますが、インフルエンザ脳症を重症化させることが明らかになっています。もし、これらの薬が置き薬として手元に残っていても絶対に使用しないでください。インフルエンザに使用される解熱剤はアセトアミノフェンという成分が主体の解熱剤です。必ず、医師と相談してください。



インフルエンザ脳症について詳しく知りたい場合は、岡山大学大学院小児医学科 森島先生らによる「インフルエンザ脳症の手引き」等も参考にしてください。

<http://www.okayama-u.ac.jp/user/pedhome/pedhome.html>

<http://idsc.nih.go.jp/disease/influenza/051121Guide.pdf#search='インフルエンザ脳症ガイドライン>